

阿岐のまほろば Vol. 36

戦国城下町 白市のナゾを解く!!

おどいせき たかやちゅうしらいち
御土居遺跡 (高屋町 白市)



御土居遺跡と白市の町並み (平成17年度)

御土居遺跡は、今なお、江戸時代のたたずまいを残す高屋町白市の町並みを見下ろす小高い丘の上に広がる遺跡です。

県道の改良工事に伴って、平成13年度から平成18年度まで7次にわたって調査を行ってきました。『阿岐のまほろば』Vol.25、33でお知らせしていますが、今号では、調査によって明らかになってきた御土居遺跡の姿と城下町白市との関係についてアプローチしてみましょう。

さて、平賀氏は、元々出羽国平鹿郡(現在の秋田

県横手市周辺)を名字の地とする鎌倉幕府の御家人でした。鎌倉時代に当時高屋保と呼ばれた現在の高屋町域に地頭として移り住みます。

当初、本拠としたのは高屋堀の御蘭宇城(県史跡平賀氏の遺跡 御蘭宇城跡)とされ、周辺には崇敬を集めた七社神社や円満寺跡、円福寺跡などの多くの寺院跡、「馬場」、「鍛冶屋」、「古市」などの城下集落の存在をうかがわせる地名が多く残っています。

平賀氏は、戦国時代初めの弘保の時代、標高の

低い御蘭宇城では戦国の争乱を切り抜けないと考え、1503年、本格的な山城である^{しろやまじょう}白山城（県史跡平賀氏の遺跡 白山城跡）に居城を移したとされます。同時に御土居を築き、家内安全を祈念してその一角に土居荒神社を建てたと伝えられています。

白市の町は、白山城の西麓、南向きの斜面に広がる小さな町です。この町は、常識的に考えるととても不思議な町です。

白市は江戸時代から20世紀の半ばまで、近辺ではとても栄えた町でした。江戸時代の初期から重要文化財旧木原家住宅などの^{まちや}町家が建ち並び、広島藩内で3か所しか置かれなかった芝居小屋まであり、歌舞伎などが催されていたそうです。しかし、水の便も悪い山の上の町がどうして賑やかに栄えていたのでしょうか。この町に来るにはどの方向からも坂道を登ってこななければなりません。

また、白市の成り立ちもよくわかっていません。江戸時代末期に記された白市村「^{こくごんし ごようかきあげ}国郡志御用書上帖」によれば、^{ぶんき}文亀3（1503）年平賀弘保が高屋堀の御蘭宇城から白山城に本拠地を移し、高屋東村の一部を割いて白市と名付けたとされます。また、一説には、町の北端、丘陵の頂部に建つ養国寺の門前町として成立し、その富を自分のものにするために平賀弘保が白山城を築き城下町としたとも言われています。どちらがより真相に近いのでしょうか。

実は、これらのナゾを解くカギが御土居遺跡の



御土居遺跡南面石垣（平成16年度）

発掘調査にあったのです。

7次にわたる発掘調査と現存する絵画資料によって御土居遺跡は、南側に門を設け、その両側に高石垣を築いていたことが明らかになりました。

遺跡の西南端は、土居荒神社の鎮座する規模の大きな土塁とその外側に堀が現存していますが、今年度の調査によって、堀がさらに北に続き、全長約80mもの長さの大規模な堀であったことがわかりました。堀の北端20mほどの調査区の内、南半部では現状で深さ約2.5m、幅約4.6mの立派な堀が出土しましたが、堀を渡る土橋状遺構を境にして北側では、現状で深さ約80cm、幅も約2.5mと極端に小さくなっていました。



御土居遺跡西側堀跡と土橋状遺構（平成18年度）

これは、南側の立派な石垣と合わせて考えると、敵の攻撃に耐えられる構造よりも、御土居の前を通る人や御土居に入ろうとする人たちに対して御土居を立派に見せようとした視覚的な効果を狙った構造を重視したということができないのでしょうか。

また、堀は北端でテラス状となり、90度東に折れて延びていました。どこまで延びているのかは調査区外であるため明らかではありませんが、テラス状遺構のすぐ北側には、それと平行して「^{いっ ほんまつみち}一本松道」と呼ばれる道が走っています。この道は今でこそ里道ですが、江戸時代から近年まで白市と高屋東全体の鎮守である福岡八幡神社を結ぶ主要な道でした。一本松道はテラス状遺構同様、堀

跡とは90度の角度を作っていますから、御土居遺跡は、宅地化されて様子の明らかなでない東辺を除いて石垣のある南辺、堀跡のある西辺、一本松道に沿う北辺が90度ずつで結ばれる約120m×80mの長方形を形作っていたと考えることができるようになりました。



御土居遺跡想像復元図

さて、御土居遺跡の周囲には、「宮内殿」「御屋敷」「浄土寺」などの中世に由来をもつと考えられる地名が、まるで御土居遺跡を取り囲むように数多く分布しています。詳細に見てみるとそれらの地名には一定の決まりが見て取れます。「宮内殿」などの武家屋敷地名は白市に入る谷筋に集まっていますが、養国寺を含めて「浄土寺」「長慶寺」「新念坊」などの寺院地名は北側の丘陵上や西側の丘陵上に集まっています。また、「ミセヤ昌」「土器屋町」などの商工業を窺わせる地名は白山城跡の西麓に集中しているのです。

これらのことから、白市という町は、御土居を町の中心に据え、白山城を守りの要として、敵の進入路となる谷筋に武家屋敷を配し、町を取り囲む丘陵上には寺院を置いて宗教的な空間とするとともに、白山城と御土居の間に商工業者を集めるという、極めて計画的な都市であったことが推測できます。

さらに、今回の発掘調査によって、白市を東西に走る主要な道路（北から栄町の通り、一本松道、白山城と御土居を結ぶ東西道）が御土居遺跡の南

北辺と平行であることが明らかになりました。このことは、御土居遺跡が白市の街路の基準であったことを示唆しており、現在に至る白市の町並みの基礎が御土居遺跡を中心に定められたことを意味しているのです。

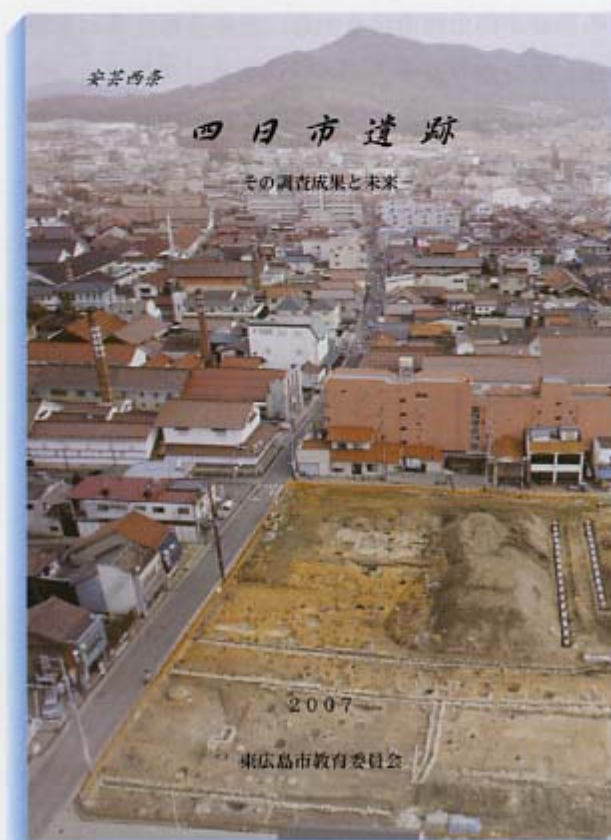
白市の町が山の上にあるのも白山城と一体となった城郭都市という性格からであり、平賀氏の城下町として領内の政治・経済・交通の中心として整備されたことが、城下町でなくなった後も白市が発展した要因だったといえるのではないのでしょうか。

御土居遺跡は、発掘調査によって、16世紀半ばから後半に中心をもつ遺跡であることが明らかになりました。戦国時代後半の居館のあり方だけでなく、白市という興味深い戦国城下町の成り立ちを考える上でも、御土居遺跡は注目すべき遺跡であるということができそうです。（吉野）



白市周辺の地形と地名分布図

『安芸西条 四日市遺跡 —その調査成果と未来—』が刊行



(財)東広島市教育文化振興事業団では平成10年度から17年度にかけて発掘調査をおこなった四日市遺跡の調査成果をまとめたパンフレット『安芸西条 四日市遺跡—その調査成果と未来—』を東広島市教育委員会からの委託で編集しました。

四日市遺跡とは？

四日市遺跡はJR西条駅南側の西条岡町・本町一帯に広がる近世・近代を中心とする集落遺跡です。遺跡内を近世山陽道（西国街道）が東西に貫き、その街道に沿って江戸時代の宿・四日市宿があったことで知られています。

この四日市宿の中心部分が西条駅前土地区画整理事業に伴って当事業団によって発掘調査されました。調査総面積は18,000㎡を超え、これほど大規模な近世遺跡の調査は県内でも初めてのことで

した。調査では宿屋や店舗の建物跡、酒都・西条らしく酒造りに関する遺構が見つかりました。また多量の陶磁器や瓦類が出土し、市内の近世史を考える上で重要な資料を提供しました。

四日市遺跡の紹介資料の決定版

パンフレットでは以下の項目で四日市遺跡の発掘調査の成果を紹介しています。

町割と蔵

宿と坪庭

酒都西条のルーツ？ 醸造遺構

生活を支えた井戸・埋桶・埋甕

江戸の匠！ 巨大礎石と謎の柱穴

四日市のうつわ変遷史

賀茂台地の二大窯業 原村焼・小谷焼

復元！ 旅の食膳

西条・四日市の赤瓦の起源は？

四日市出土品図録

四日市宿と文化人たち

今なお残る四日市宿

賀茂台地の中心都市である四日市宿の「食」と「住」そして酒造りという地場産業の伝統を知る上で必携の一冊となっています。みなさん、ぜひお手にとってみてください。（中山）

東広島市教育委員会 生涯学習部 文化課

で配布しています。（TEL 082-420-0977）

(財)東広島市教育文化振興事業団 文化財センター報

阿岐のまほろば Vol. 36

発行日 2007（平成19）年3月26日

発行 (財)東広島市教育文化振興事業団/文化財センター

編集 東広島市西条町馬木541-1

TEL 082-425-3880 〒739-0033

印刷 大東印刷株式会社

東広島市西条下見五丁目8-17